

母子福祉の理念と対人援助原理

望月 雅和

Child and Maternal Welfare and Principles of Human Care

Masakazu MOCHIZUKI

Abstract

Child and maternal welfare and human care have become markedly correlated with scientification. At present, much emphasis tends to be placed on scientific evidence in the fields of counseling and psychotherapy (Prochaska & Norcross, 2010). In the field of social welfare, the management efficiency tends to be considered scientifically, as represented by the philosophy of the report on the Reform of the Basic Structure of Social Welfare (Central Social Welfare Council, 1998). Based on the present status of such intricately scientified and specialized human care research, this study pays attention to the underlying principle.

The purpose of this study was to introspectively deepen the consideration of the principle of helping people, by taking the opportunity of reflecting on the source of assistance for child and maternal welfare. In particular, the topology of psyche is analyzed while determining the correlation between the foundation of the Okayama Orphanage, which contributed to the origin of the charity work in Japan, and to the aspect of commitment to scientification after the dissolution of the orphanage. Voluntarism, interdisciplinarity (Frodeman et al., 2010), plurality (James, 1909; Russell, 1921), critique (Yamakawa, 1933), communal communication (Takenaka, 1979; Visser't Hooft, 1960; Dewey, 1934), and learning community correlated with liberal arts education have been found to be the basic ethos.

Key-words

child and maternal welfare, charity and science, interdisciplinarity, ethos of voluntarism, topology of psyche

はじめに

福祉実践活動の源流の一つともされる、石井十次によって誕生した岡山孤児院は、「近代日本を代表する慈善事業」⁽¹⁾と評されてきた。岡山孤児院関連の資料集成である『岡山孤児院関係資料集成』⁽²⁾の推薦の言において阿部志郎は、「親に棄てられ、飢えている子を探し出し、無条件に受け入れた石井の愛、大胆ではば広い行動、それを支えた祈りの生活に、深く心を打たれる」⁽³⁾と述べた後に、以下のように記している。

条件・方法——建物、人材、財政が制度によって整えられて、はじめてニード対応する現代の私たちにとって「精

神があれば方法は自然にある」という石井の強烈なボランティアリズムは衝撃的で、これこそ福祉実践の原点であるまいかという思いを抱き続けている⁽⁴⁾。

近年、社会福祉や子育てに関わる対人援助、保育の領域は、理念と現実において、根本的な構造変化を迎えている。象徴的なのは、1998年の中央社会福祉審議会の社会福祉基礎構造改革の報告（中間まとめ）⁽⁵⁾以後の改革の理念に含意されるような、「経営」の視点の導入である。慈善やボランティアに由来する社会福祉や対人援助とは、一見すると遠い領域にあると思われる経営及び経営科学的な視座は、現在において不可避ともいえるほ

どの影響力を有しているといつてよい。

この報告において、「事業者を効率的な経営主体として育成しようとする取組が欠けている」⁽⁶⁾と評されるように、社会福祉や対人援助実践に関する組織の運営 (administration) の改革が進んでおり、「サービス利用者と提供者の対等な関係の確立」⁽⁷⁾という理念の下、経営科学的なマネジメントが要求される。消費者行動分析にあるようなニーズ分析の手法は、社会福祉施設や子育ての分野において急速に相関してきており、サービスを受ける利用者や子ども、さらには、母子に対する科学的分析、仕事や労働の計量、それらを総合する経営マネジメントの意義はさらに大きくなっていくだろう。経営主体間の競争の優位性を探るポーター (Michael E. Porter) に由来するような競争戦略 (Strategic Management) は、ヘルスケアの領域まで経営科学的に連関する⁽⁸⁾。

こうした科学的思考の重大化は、メゾな中間集団としての福祉や教育、医療組織のマネジメントのみならず、ミクロな対人援助実践、精神や心理への領域にも波及する。例えば、母子などに関わる対人援助の心理学、カウンセリング心理学 (Counseling Psychology)、心理療法の領域では、従来にあった心理的技術の諸流派のバランスが急速に変化をしてきている。述べるまでもなく、これまで臨床的な対人援助原理の基底にあった精神分析的力動理論は、母子関係の分析などにおいて、重要な意義を有していた。しかし、国際的にカウンセリング/心理療法研究で知られるプロチャスカ (James O. Prochaska) とノークロス (John C. Norcross) の心理療法の諸システムに関する論考 (*Systems of Psychotherapy: A Transtheoretical Analysis*)⁽⁹⁾にあるように、これまで重視されてきたフロイト (Sigmund Freud) の精神分析、ロジャース (Carl R. Rogers) による来談者中心療法、メイ (Rollo May)、 فرانクル (Viktor E. Frankl) のように実存心理学的に把握する実存療法といった種々の重要な技法を踏まえた将来への展望として、ベック (Aaron T. Beck) などが理論化に貢献し認知科学⁽¹⁰⁾と相関性の強い認知療法 (Cognitive Therapy)、特に認知行動療法 (Cognitive-Behavior Therapy) が格別に増加することが予想されている⁽¹¹⁾。

我が国でも認知行動療法は、深刻な問題となつていくうつ病の治療に高いエビデンスを有するとして重視されている。医学的な認知行動療法の対人援助実践は、「証拠にもとづいた実践 (Evidence-Based Practice: EBP)」⁽¹²⁾と親和的であり、2010年の診療報酬改定で保険点数化がなされて、精神医療における公的なプレゼンスをさらに高めた。

以上のように、科学技術的で医学的な対人援助の普及、あるいは、メンタルヘルスケア分野における経済学 (Economics of Mental Health Care)⁽¹³⁾や経営科学への傾斜を強めながら、細分化した技術が相対的に影響力を増している。もとより、理論史をみれば明白のように、社会福祉、教育、あるいは、対人援助に関する理論は、リアリティへとプラグマティックに相関しながら学際的で多様性を尊重しており、排他的で原理主義的な理論を絶対とするものではなかった。

例えば、カウンセリング心理学の範疇においても、ワクテル (Paul L. Wachtel) やラザルス (Arnold A. Lazarus) などが論じているように、諸原理を相対的に思考しながら考察を深めている理論構成が存在する⁽¹⁴⁾。我が国のカウンセリング心理学形成においても、国分康孝によるカウンセリング心理学への構想と先行研究成果は、プラグマティックに諸原理を相対化できる思考を有していた⁽¹⁵⁾。それでは現状にあるような、複雑に科学への傾斜が急速に進む現代にあって、包括的な対人援助原理の源泉、母子福祉の理念をどのように捉えたらよいであろうか。

本研究の目的は、変化の激しい現代的思潮を踏まえて、慈善の源流にまで翻って理念を反省的に捉え直し、対人援助実践へと至らせるボランティアの源流から、次第に科学や社会へと傾斜していく流れの原初的な理念を改めて考察することにある。特に分析を加える思潮は、我が国の慈善活動の理念的源流の形成者でもある石井十次とその後の精神的位相であり、その中でも岡山孤児院の経営を支えて石井没後に科学へと傾倒していった大原孫三郎へと連なる流れに焦点を当てる。そのために、慈善活動から科学的な研究が称揚されて研究所が形成し、母子関連の研究が蓄積されていった研究文献にも検討を

加える。

筆者は労働省婦人少年局の関係者、医学者などと共同で当時の論文資料の編纂をなした資料集成を刊行しており⁽¹⁶⁾、特に教育に関わる福祉心理、医学、保育などの領域を担当し、関連研究を続けている⁽¹⁷⁾。本研究においては、原初的な慈善の発現から科学的な研究へと傾斜をしていく精神の位相を対象とし、母子福祉に関する援助の源流に翻ることを契機として、人を助けるという原理を反省的に考察していく。

1 慈善から科学へ——石井十次の岡山孤児院における精神的位相

現在の社会福祉や母子福祉の法的基礎である社会福祉六法の形成は、敗戦直後の生活保護法を嚆矢とし、児童福祉法、身体障害者福祉法から母子及び寡婦福祉法などへと関連法が体系化されていったが、戦前期の社会福祉の法体系は極めて不完全であった。恤救規則や救護法といった法は存在したが、人権や権利の観点から明らかに問題があり、母子の陰惨な状況、さらに性と生殖に関する健康/権利 (Sexual & Reproductive Health & Reproductive Rights: SRH/RR)⁽¹⁸⁾ から考えても重大な問題があった。

そして当時のこのような法制度が不備の中、家族内部から離れた子どもに、直接に対人援助実践をなし、最大規模の慈善活動となる孤児院を岡山に創造していったのが石井十次であった。ここでは、そのボランティアズムの源流に注視し、実践を湧現させた精神を改めて考えてみたい。岡山孤児院が形成され、それを強く支えるのみならず、後の経営を引き継いだ大原孫三郎による孤児院の「解散」、そして、母子に関わる科学的分析へと移行する底流にある精神の位相を注視する。

石井十次による子どもへの福祉観をパラダイム転換するほどの原理、つまり子どもは母親が育てるというテーゼを相対化させ、対人援助実践とその支援を組織化することにより岡山孤児院を形成した石井の精神の源に、宗教、特にキリスト教の影響があることは広く知られている。例えば、彼の実践に影響を与えたのは、ペスタロッチ (Johann H. Pestalozzi) といった古典的な教育思想家

のみならず、イギリスのキリスト教牧師にして孤児院を運営したミュラー (George F. Müller) の思想の重要性が先行研究で指摘されるのも⁽¹⁹⁾、彼の有した敬虔な信仰心の故である。本論では、その使命を湧現させた精神の源を再解釈し、精神的な位相の論考を深めるために、特に当時の岡山の地のキリスト教徒の連関に焦点を当て論及したい。

そもそもなぜ、当時の岡山の地にキリスト教が内在化されていて、石井のような敬虔な福祉実践家が誕生していったのであろうか。この問いを立てる時、ここには明確な思想の系譜が見いだされ、人と精神の位相を見る際に大きな手がかりを与えてくれる。この「岡山」に発現していった理念の源流は、アメリカのボストンに由来し、アメリカンボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) による思想と教育の影響が見出されるのである。

アメリカンボードとは、1810年に設立されたキリスト教宣教団体であり、その理念を世界的に普及する使命を有し、その思想を普及させていった組織である。特に、岡山に内在化していく宗教的なエートスの発現へと連なるのは、神戸ステーションによる伝教である。1869年、アメリカンボード宣教師であるグリーン (Daniel C. Greene) が先鞭をつけ、キリスト教の普及がなされていった。

この中で看過できない重要な点として、神戸ステーションのミッションにおける、教育実践の重視があり、我が国へのアクチュアルな影響がある。象徴的なのは、同志社大学や神戸女学院大学へと相關していった、キリスト教理念に基づいた高等教育機関の形成である⁽²⁰⁾。石井十次と大原孫三郎は岡山の地に関わり、大原は岡山孤児院を継承するほど濃密な親交があった。さらに、大原の同級生でもあり、お互いに影響を与え合った山川均は同志社で学び、キリスト教の強い影響を受けて、後の社会運動の思想形成の基底をつくっていった。均は、後に働く母親や子育てに関して、戦後の公共性と家族秩序の変容に影響を与える山川菊栄の夫であり、夫と妻の親密な結びつきは、波乱の生涯の中で継続された。

山川均も学んだ当時の同志社大学の形成において、神

学的な理念の教育に影響を与えた人物に、ラーネッド (Dwight W. Learned) がいる。ラーネッドは、新島譲が創立した同志社大学の初代学長として、同志社大学の存立そのものに影響を与えたが、教師として卓越していたのは、教育人間学的な深遠な神学や教養のみならず、経済学による社会科学的な思想をも包摂する教授をしたことである。それは彼が学んだエール大学で研鑽したりベラルアーツ的な深遠な教養と親和的である。

後に山川均の妻となった山川菊栄は、女性問題や働く母親の子育ての問題に、我が国で初めて社会科学的な思考を持ち込んだとも言われている。そこには母子に関わる貧困問題、社会福祉の形成に直接関わる構造的な着眼がある。菊栄は、戦後には労働省婦人少年局初代局長に就任して公共性へと影響を与えたが、思想的な相関性のある夫の均を通して、精神の位相を考えると系譜学的な論考が可能となる。

また、特筆すべきことの一つに、山川均の姉である山川浦が、倉敷コミュニティへのキリスト教伝道の日本側の源流の一人である林源十郎と結婚していることがある。林も同志社で学び、そして浦は神戸女学院で学んでいる。浦は後にキリスト教徒となっているが、山川均と林源十郎が同志社で学んだように、それぞれアメリカンボードの宣教理念の思想的な影響を受けてきたことが見て取れる。林源十郎は、石井十次と大原孫三郎を引き合わせる際に活躍し、後の岡山孤児院の展開へと極めて重要な役割を演じている。

こうした一連の人間形成の思想的位相、石井十次、林源十郎、山川均、そして、大原孫三郎といった精神の位相に焦点を当てた先行研究は希少であるが、例外的に秀逸な研究に、神学者の竹中正夫による『倉敷の文化とキリスト教』⁽²¹⁾がある。竹中は、ラーネッドと同じようにエール大学で研鑽を積み、同志社大学で教授をしながら神学の探求をした⁽²²⁾。

「倉敷」というコミュニティ形成に関する神学的研究は、ウェーバー (Max Weber) による宗教社会学的なトポスと精神への分析を包含し、エートスの形成に論及する重厚なものとなっている。580ページに及ぶ濃密な研究書において、石井十次、山川均、大原孫三郎といった

人物へ精神の分析をなしている。これは、社会福祉原理や対人援助、心理社会的な精神分析をする際に重要な示唆を得られるだろう。

特に、本章で注目したいのは竹中の研究における、実践原理に関連する人と人々における精神形成⁽²³⁾、実践家と実践家を通じた関係性、精神の「交わり」への着眼である。人と人の交わりの重視は、精神科医で哲学者であったヤスパース (Karl Jaspers) における実存的な *kommunikation* 概念が有名であろう⁽²⁴⁾。そこには、近年の教育実践やビジネスにさえも重要視されるコミュニケーション (communication) の概念存在を異次元へ誘うほどの深層あり、生き方を全体論的 (holistic) に問い直す水準の交わりへの洞察がある。

竹中はこうした人間の精神の交わりを指摘する際、オランダの神学者のヴィサトーフト (Willem A. Visser't Hooft) の論考が⁽²⁵⁾、交わり、宣教、奉仕を教会の使命としていると指摘しながら、倉敷教会と石井十次の孤児院との関わりへと相関させて言及している⁽²⁶⁾。ヴィサトーフトは社会的福音 (Social Gospel) に興味を寄せて、さらに強制的なナショナリティへの批判精神を有してもいた。彼は当時のナチズムに強く対抗し、ドイツから逃れる人々を助けていた。奉仕の精神が、社会的な事象とも相関して捉えられていたのである⁽²⁷⁾。

竹中は倉敷の共同体に芽生えた精神の交わりについて、「聖徒の交わり」⁽²⁸⁾とも呼んだ。さらに具体的な人物の相関についても指摘しており、例えば、「明治期における岡山・倉敷の信徒の交わり——草創期の人びと (大原・石井・林の三家の場合)」⁽²⁹⁾と明記している。石井の孤児救済の実践活動を支え、宗教的な使命感に基づいて徹底して支援をおこなった大原は、さらに石井の死後に運営を継承していく。さらに自らが孤児院を「解散」し、大きな構想を持続しながら科学への傾倒へと至るのである。

ここには、ボストンに由来しアメリカンボードから倉敷の共同体形成へと精神の相関が見られる。そしてこの共同体の内部に、精神の交わり、深い次元の学びの中で発現していく、使命感に基づいた多様な具象化、慈善から科学への精神的な位相がある。大原の科学の傾倒は構

想だけでなく、岡山孤児院を解散させて、自らが大原社会問題研究所を誕生させていく。

看過できないのは、その所長の任を担ったのが高野岩三郎だったことである。大原の同級生で親友でもあった山川均は、政府批判により投獄までされるほど当時のナショナリティの発揚は激烈であった。高野は東京大学の経済学部形成に寄与するなどしていたが、ナショナリティへの急進的な批判を有し、特に生活と貧困への視座も有していた。そうした彼を大原は所長として着任させたのである。

岡山孤児院から派生した大阪事業である、貧困が激しい地区の子ども達を対象とした保育などの事業は、石井の死後に大原の援助の下で、石井記念愛染園へと独立して組織化される。さらにそこには、救済事業研究室が設置されて、これがその後の大原社会問題研究所の形成へと連なっていく。そして大原社研の所員であり、医学者で科学的な手法や母子研究の学識を有していた暉峻義等が所長に就き、同所の労働衛生部門を独立させ倉敷労働科学研究所が誕生して労働科学研究所へと発展していく。

石井との精神的な交わりを経ながら大原は使命感を陶冶し、「倉敷を東洋のエルサレム」にしたいとの誓願を立てるほど、強烈な使命感を有していた⁽³⁰⁾。この誓願は組織の具象化のみならず、慈善やボランティアから科学へと、新しい法理であるディスプリンや方法を変質させていった。次章では石井の没後、大原によって誕生していった科学に関わるエートスを俯瞰しながら、当時の研究文献も踏まえて、さらに論考を続ける。

2 社会と臨床の科学

2-1 慈善と科学、及び貧困

慈善の実践活動、宗教的なエートスを帯びた岡山孤児院が、大原孫三郎により「解散」させられたのは、1926年であった。岡山孤児院は、石井十次により1887年に設立されて大原孫三郎の支援を受けたが、例えば、アメリカンボードの牧師のペティー（Alice B. Adams）からも大きな財政的な支援を受け、キリスト教徒の炭谷小梅の献身、石井の郷里である宮崎県にある茶臼原への移住、

大阪事業への展開などによる複合的要素から存立していた⁽³¹⁾。さらに現実に、2千人を超える岡山孤児院卒院生（その末裔は数万人に達するともいわれる）⁽³²⁾を出すという歴史的な実践活動をなしていた院を、1914年に石井が死去した後、経営を継承した本人自身が解散していくのは、精神の相関を考察する際に興味深い。

1917年には大原の援助の下で、石井記念愛染園が設立し孤児院とは独立を果たす。1918年には救済事業研究室が愛染園内に設置されて、これが1919年に歴史的な大原社会問題研究所の形成へと寄与していく。大原社研は戦後に法政大学大原社会問題研究所となるが、我が国の社会科学に大きな影響を与えた。大原社研の所長を務めた二村一夫によれば、石井十次も間接的に「大原社会問題研究所を創った人びと」の一人であると論じており興味深い⁽³³⁾。

宗教性を帯びた石井から大原による壮大な構想は、慈善から科学へとそのディスプリンや方法を変質させていったが、社会福祉や母子福祉から洞察しようとするとき重要と思われる論点に、社会的な「貧困」への着眼がある。もともと大原社研を設立する際、二村が指摘するように、古典ともいえる『貧乏物語』⁽³⁴⁾で著名な経済学者の河上肇と大原が関係していることが重要と考えられ⁽³⁵⁾、初代所長には高野岩三郎が着任することになった。河上は我が国の貧困への認識に史的な影響を与え、高野も東京大学経済学部内に、エンゲル係数で有名なエンゲル（Ernst Engel）文庫を整理し、労働家計調査への視点を見出すなど、今日にも重大であり続ける「生活と貧困」の問題に対する先駆的な研究への洞察を有していた。

社会福祉とそれに関する対人援助原理は述べるまでもなく、貧困への着眼が極めて重要である。歴史的にも戦前の恤救規則から戦後の生活保護法を端緒とした社会福祉六法の形成、社会福祉史的な淵源にイギリスのエリザベス救貧法があったという立法の軌跡は、社会福祉を学ぶ上での古典的なトピックといってもよいであろう。

しかも、近年の日本の現状から見ても、母子福祉や子育て、教育領域では、ペアレントクラシー（parentocracy）、家族や母子間の経済的な「格差」の問題は、90年代以後

の冷戦崩壊後の国際化と競争の激化により、深刻な問題であり続けている。こうした貧困による格差が、母子や子育てによる教育的な営みを通して、次世代へと貧困を再生産させる可能性も孕むものであり、その意味でも保育の充実は尊重されるべきであろう。

大原はこうした社会や経済への知見を有しながら、相關的に医学や心理の研究も促進する、労働科学研究所を発足させた。初代所長になった暉峻は東京帝大で医学だけでなく、日本の心理学の淵源でもある心理学者の元良勇次郎の講義などに影響を受けて実験心理学的な素養まで学んでいた。暉峻はさらに医学部の在籍中に大規模な貧困調査に関わっていた。

貧困調査は社会福祉の形成において重大な意味を有し、ラウンツリー (Benjamin S. Rowntree) は、社会福祉の古典研究として知られるが、暉峻義等はこれを自らの研究と比較しつつ貧困調査をなした。そして、自らが倉敷労働科学研究所の初代所長に就任した1921年に『乳児死亡の社会的要因に関する考察』⁽³⁶⁾を大原社研出版部から成果として出版している。ここでは子どもと母親の貧困を社会的な要因と相関させながら科学的な分析をしている。子どもを死亡させるほどの要因の分析を、医学と社会とを関連させて科学研究に携わっていた。

大原のミッションは、高野岩三郎による大原社研のリーダーシップを促し、暉峻の医学や臨床科学の導入により、母性領域の医学的な研究は展開されていく。さらには、当時の母子領域研究と女性労働の研究資料を概括し鳥瞰できる成果までが出版されることになる。この史的な出版物の一つが、『婦人労働に関する文献抄録』⁽³⁷⁾ (以下の本文中では『文献抄録』と略記)であった。以下ではこの文献目録に関する意義を論じ、特に母子や母性領域の関連文献についての論議を進めていく。

2-2 科学化と研究文献の検討

2-2-1 『婦人労働に関する文献抄録』の思想的底流

我が国の最大規模の慈善活動をなした石井十次は、大原孫三郎や山川均、林源十郎といった様々な精神的交わりを通し、没後に大原による運営を継承させ孤児院解散をしていく。その後、大原は科学への傾倒をみせ、研究

所形成では高野岩三郎を所長に、さらに森戸辰夫、大内兵衛という戦後のアカデミズムの一大潮流になる所員を糾合しつつ、さらには、母子関連の医学研究へも射程を広げ、医学や臨床科学へと活動の広がりを見せていった。

大原を対象とした研究をなした兼田麗子は、彼を福祉実践の先駆者と位置づけている⁽³⁸⁾。近年、社会福祉でも経営の視座やメセナ/経営倫理の視点の重要性が叫ばれているが、時代的にも極めて先駆的な活動であった。しかも大原は、単に経済的な援助をしたという評価だけでなく、その着眼の思想的レンジの広がり、今から見てもその原理の多様性に改めて驚かされるものがある。

それは石井十次による直接援助実践の支援、ボランティアリズムから発現される子どもへの福祉実践を大原は支えながら、さらに別に社会科学、しかも、投獄もされている森戸辰夫、あるいは大内兵衛をも糾合する研究所をつくって支援をした。さらには、医学など自然科学への視座をも包摂していた。このことは、大原が一民間人の「経営者」、「実業家」であったことを考えてみても目を見張る。

こうした経緯から誕生した『文献抄録』は、当時の関連研究の膨大な研究成果がインデックスとして鳥瞰できる史的な成果である。それは妊娠、出産、子育て、福祉施設、女性労働一般から女性の労働条件などを含む、様々な研究資料をカテゴライズしてまとめ上げただけでなく、その研究方法 (methodology) や思想傾向をも多様性を尊重していて分類して集成しようという意図が随所に見られる。

例えば、本文献抄録の初めのカテゴリー、婦人労働一般に関する領域に着眼しても、体制側から研究をする内閣統計局や商工省、日本銀行など政府の文献資料、医学や産婦人科の自然科学の論文と並置して、批判的な言説により投獄を経験した森戸辰男、夫が投獄されながらも母子や保育、児童虐待などへのクリティークを展開した山川菊栄の論文もが掲載されている。当時のナショナリティの発揚を考えた時、こうした多様な原理への志向は注目され、自由に学問や論議を再検討する研究文献となり得よう。また、今日から見る時、読者が当時の原資料に関してどのような立場をとっても、様々な領域の研究

者が史的な研究書として活用できる可能性も拓いたといえる。

これら様々な領域の文献抄録に掲載されたものからエッセンシャルな論文を選び、題名や抄録だけでなく、本文全体をも通読できるように原資料を集成したのが、『戦前婦人労働論文資料集成』⁽³⁹⁾であった。その集成は収録されている原資料だけでも膨大なものになり全八巻に及ぶ出版となった。作業自体も何人かの省庁関係者や医学者、ジャーナリストと共に、筆者も編纂に関わり刊行したのである。

監修を務めた赤松良子は、推薦の言において過去を回顧しながら、当時の先行研究を体系的に網羅したものとして、『文献抄録』の存在を労働省の先輩に教えられたこと、簡単には手に入らず入手できた思い出を述懐している。そして今回、新たに抄録だけではない原文を掘り起こして復刻しようとする作業の困難さを述べつつ、貴重な資料となることは疑いないと述べている⁽⁴⁰⁾。

こうして完成した当該資料集成を、現代において、いかにして読み込み分析して解釈をしていくか、読み手の専門分野や思想、今後の時代状況の変化により、多様な切り口や繰り返し再解釈される可能性があり得よう。

本論文の射程では、母子福祉の理念を論考の契機として、対人援助原理を考察することを目的としており、特に孤児への慈善活動実践から大原孫三郎の科学への傾倒、高野岩三郎のリーダーシップを経て、母子の医学による専門的な研究が細分化していく、慈善から科学への移行に注目して論じてきた。こうした本論文の論旨を基底としながら、特に本論に関わる妊娠・出産、子育ての分野にある原資料を再検討して、本論の議論を展開していく。

2-2-2 臨床科学及び医学への着眼

対人援助原理、特に、妊娠や出産に関わる乳幼児の実践活動は、臨床医学や科学技術と容易に切り離して論じることが危険を伴う。生命が誕生して育っていく妊娠・出産に関わる科学的素養、医学領域に見られる現象観察と研究成果を踏まえた発育支援は、時として生死に関わるほどの意義を有している。それは、例えば死産など

生と死に関わる生命倫理的な論議とも強い相関を示している。

それでは慈善的な活動が湧き起こり、科学化による方法が新しく流入して原理形成がなされてきた当時、どのようなパースペクティブにおいて、妊娠や出産、子育てに関する論議が行われていたであろうか。本節では「臨床科学及び医学への着眼」として、改めて研究文献を類型化することにより原典を再検討したい。

初めに医学者の暉峻義等の論文を見てみたい。暉峻は自らが大原孫三郎、高野岩三郎との関わりを経て労働科学研究所所長に就任し、『文献抄録』を編纂して当該抄録の序言まで執筆しているが、自身もまた乳幼児や養育を対象とする医学研究者でもあった。

本領域の彼の収録論文は二つある。一つ目の論文は、「労働階級夫人の出産に関する調査報告——産業経営における生物学的事実の価値についての卑見」⁽⁴¹⁾であり、「経営」の視座から医学的な研究をしていることが注目される。もう一つの論文は、「妊婦に関する労働生理学的研究」(附「妊婦保護法規改正に関する提案」)⁽⁴²⁾である。ここでは、妊婦の基礎新陳代謝の変化といった臨床研究に加えて、婦人労働者の妊娠保護に関する法規改正の提案までがなされている。

一つ目の論文、「労働階級夫人の出産に関する調査報告」⁽⁴³⁾においては、出産に至る詳細な家庭訪問や直接訪問による調査が行われ、結婚年齢・不妊などの分析がされている。そこでは医学の側面だけでなく、社会や経済への側面にも言及がなされている。社会的生活の上に矛盾が生み出されたと指摘しており、経済構造への言及も見られる。

もう一つの彼の論文、「妊婦に関する労働生理学的研究」⁽⁴⁴⁾においても、同様の視座が見出される。本論文では、妊婦の詳細な妊娠過程の測定という科学技術的な分析がなされているが、女性の経済的な「生産的行為」と妊婦の「生理的变化」という、経済合理性が身体へ影響しているという臨床医学的な論点を有し、法規改正への提言をしている。

近代化における貧困と子育てや保育の問題として、地方や農家の子育て・妊娠や出産に注目する臨床科学的な

研究もある。岩崎辻男による「農家主婦の母性的活動に関する研究（農村婦人の妊娠、出産、保育に関する考察）」においては、「妊娠、出産、保育」を対象としている。農村女性が、生理的過程を自然の内に半ば体得しているだけでなく、臨床科学的な視点から、衛生への「文化」が至らないために生命の犠牲が大きいとも指摘し、生活の在り方へも言及していることが注目される。

産婦人科学の立場からの研究である、岩田正道の論文も収録されている。「工場婦人と母性機能」⁽⁴⁵⁾と題された論考においては、その緒言において工場女性労働者の増加の現状を踏まえ、医学的な立場から、女子の工場労働について知ることが最も緊急であると述べている。そして、諸統計や各国の文献を論議しながら、女性の工場労働がいかに母性へ被害を及ぼしているかを述べる。不妊症や中絶の問題も取り上げ、産婦人科医が被害を究明していくことが急務であると指摘する。

同様に産婦人科学の立場から、特に農村に着眼した研究も収録される。白井伊三郎と横川つるによる「農村における死流産について」⁽⁴⁶⁾である。子どもの生死に関わる流産に焦点を当てており、子どもの生命に関わる観点からも看過できない論点である。臨床科学的な側面からの調査研究であり、農村女性の生活記録から死流産の原因として、医学的な施設の不備などだけでなく、特に母親の非衛生的な生活条件に着眼している。妊娠婦への対策を指摘している。

以上の妊娠・出産・育児に関わる臨床科学領域の研究は、当時の研究の志向の一端を解釈する素材になる。そこで注目されるのは、当時から科学化への傾斜が著しく、医学の体系の下での応用科学研究、統計調査も重視されて、国際比較までもされていることである。さらに経済構造への問題が実証的に指摘されているのである。他方で論議や対象が相対的に細微で、専門化が急速に進んでいることが見て取れる。

次節では、社会との相関を踏まえた研究にも着眼してみたい。妊娠や出産に関わる母性領域は、生命の誕生や発育に関わるが、人間の形成には社会やナショナリティとも密接に相関している。以下ではそうした研究文献にも目を向けたい。

2-2-3 子育てと社会の領域への着眼

国際的に教育学や保育学へと多大な影響を及ぼしたデューイ（John Dewey）は、古典的な著作、『学校と社会（*The School and Society*）』⁽⁴⁷⁾に象徴されるように、子育てと社会を相関させるパラダイムを創造的に探究した。それは、彼が批評した安易な二元論（Dualism）や排他的なイデオロギーに陥らない教育と社会への構想、実践的な事例研究（Case Study）を可能にしつつも、同時に社会分析を論じることを可能にする、近年に注目される公共性（Publicness）を反省的に探求できる次元を論及した。当時の母子関係の研究においても、こうした社会との相関関係を見出すために、本節では「子育てと社会の領域」へと類型化して、改めて文献に目を向けたい。

まず、ナショナリティの主体である中央政府の文献として、文部大臣官房学校衛生課による「女教員産前産後における休養に関する調査」⁽⁴⁸⁾を見たい。学校教育、特に女性教員に着眼した調査報告である。母性と子どもの保護は、社会衛生の重要な課題とし、工場労働者や産前産後の妊娠出産に関する論及が見られる。女性教員について、母性保護の立場から特種の保護を必要とするものと述べる。生理の際の適切な休養の必要性、女性教員による産前産後の休養実施状況が記されている。

次に地方政府の文献として、大阪府工場課による、妊娠婦に関する調査にも目を向けたい。ここでは大阪の調査状況が確認できる。「工場労働の妊娠婦に及ぼす影響」⁽⁴⁹⁾によれば、これは常時女工500人以上を使用する大規模な紡績24工場を選んで、産前産後の休養について調査報告したものである。

運動論的な立場からの文献として、奥むめおの「女性の社会的進出と乳幼児」⁽⁵⁰⁾の文章も収録されている。この論文では当時の搾取への状況を批判し、現状が児童愛護の精神からはかけ離れており、働く母親の過酷な経済状況指摘し、乳幼児へと焦点を当てながら論述している。

さらに、政府体制内にて産婦人科学による医学研究が見出されることも注目される。内務省社会局医療課長であった古瀬安俊による論文が二つ収録されている。一つ

目は、「有夫女工の出産並にその生児に関する研究」⁽⁵¹⁾であり、この研究では工業の出産に及ぼす影響を明らかにし、同時に生児の生死に関する状況への着眼がある。子どもへの生死という逼迫した状況からの研究である。夫のある女工1470人、その出産数2375人を対象として、工場労働の出産に及ぼす影響、新生児の生死を論じる。この研究方法は科学的であり、国際比較までされている。

次の文献においては、医学と保育を相関させて、妊娠の状況を含めた調査がされていて注目される。古瀬安俊と内務省社会局の中川義次による「労働婦人の妊娠並に生児保育に関する調査」⁽⁵²⁾である。工場及び鉱山における有夫女性労働者についての妊娠、分娩、出産に関する調査を基調としており、この中では子どもの婚姻年齢と出産数だけでなく、死亡率への着眼が見られる。

2-3 科学化への解釈と精神の交わり

さて以上、細分化した高度な研究文献群を類型化して鳥瞰して見る時、慈善から科学へ、医学や社会に関する科学へと精神が進歩していく、科学主義（Scientism）による史観も見いだせそうである。そこに見られるのは、石井十次が壮大に孤児への構想を有していた時に比べて、科学への傾斜の中で、遙かにリアリティへの解釈が細分化して精緻となり、客体や観察へと認識の比重が増していることが見て取れる。

しかし、筆者が先に論及した、慈善の源流の石井十次から大原の科学化へと至る精神の位相、さらに、この二人の出会いの契機をつくって岡山孤児院と大原の研究所へと影響を与えた林源十郎、そして林の親族でもある山川均——彼の姉の山川浦は林と結婚までしている——という精神の交わりへと視点を向けることにより、単純な進歩主義への強い反省をも学ぶことが可能となる。本章の最後にこの点を触れて、終章の考察へとつなげたい。

膨大なインデックスを含む『文献目録』は、先に論述した臨床医学や科学など実証的な妊娠・出産・育児の研究だけでなく、特に山川菊栄に象徴されるように、科学の視座を擁護しながらも、子どもの虐待状況や陰惨な母子状況を生み出す「構造そのもの」へ向けた徹底した批判をする論考も同時に収録しており、私たちにその存在

の意味を問いかけている。

特に菊栄は、母子領域へのクリティークを強め、児童虐待や保育の不備、それを生み出すナショナリティの秩序それ自体へと批判を継続していた。その彼女の言説は、書物の発禁処分や伏字が散見されるものとなり⁽⁵³⁾、倉敷や同志社で学んでいた山川均との結婚は、彼の投獄により彼女の身を益々危険なものとしていった。

そうした言説は、内務省や政府内で行われる現状への調査や提言とは異次元ともいえるほどの鮮烈さを有している。そしてここで注目すべき象徴的なことは、石井十次から大原孫三郎へと至る科学化を推し進めた大原本人が、同級生でもあった山川均と変わらずに精神の交流を続け、大原が危険を顧みず獄中まで訪問していることである。その際の大原の行動と勇気を均は心から感謝していると後年に明記している⁽⁵⁴⁾。

さらに、夫が投獄されてもクリティークを進める妻の菊栄に対して、石井十次もまた深い精神の交わりがあることも重要な論点である。しかし、研究の上で石井と菊栄との相関が触れられることは、二人が同じように子どもへの尊厳を願っていたにも関わらず、倉敷を介して精神の位相までもが近いにも関わらず、注目されることが極めて少ない。

石井十次と大原孫三郎と共に密接だった均は、菊栄と愛を育み結婚をした。菊栄は、彼が戦前期に投獄されている時にも、戦後には自らが労働省婦人少年局の初代局長に就任したその後においても、彼が死去するまで、敬虔な形で関係を継続していった。しかし、当時の心境は壮絶だったことは容易に想像でき、それを見守った一人が石井だったのである。

菊栄は均が癌で病死した後、彼の自伝を出版している⁽⁵⁵⁾。その本の最後にある「あとがき」に記してあるのが、命にも係わった彼の投獄のことであり、石井との交流の軌跡が印象的に綴られている。そこに描かれているのは、親類でもある林源十郎の子の手紙に書き残された文章である。

「岡山孤児院の石井十次先生」の所へと用事で行った際に、石井のあまりの愛情に山川均のことが思い出されて悲しみがかえって深まり、「涙がハラハラと」彼の

前で落ちていったこと——石井が「あれは百年に生きる人」だからと言葉を続けてくれたこと——そして、石井と共にやがて心配が氷解していった心象風景が書き綴られている⁽⁵⁶⁾。この文章を亡き夫の自伝のあとがきに、菊栄は添えたのである。

以上で取り上げたように、慈善から科学へとの流れの中で、社会の科学や臨床の科学、政府調査、そして体制への批判という多元的な見地からの母子関連の論及が散見されていた。以下には上述の論考を契機としながら、本論文の目的でもある、人を助けていくという理念、対人援助原理に関する考察を深めていきたい。

3 対人援助原理への考察

人を助けたい——この素朴なボランタリズムの精神を学理的に考究しようとする時、そこに至る原理をどこに求めればよいであろうか。岡山において石井十次が構想したような素朴に見える慈善活動の精神は、徐々に科学や社会を志向しながら、その分析はロゴセントリックな臨床科学や心の科学、あるいは、ナショナリティに関わる社会福祉関連の法体系への細緻な分析へと研究のパラダイムをシフトさせている。そこで分析されて生産されたエビデンスの集積は、ある種の教育への素材となって、私たちの前に布置される。

20世紀の初頭、数学者で哲学者でもあったラッセル (Bertrand A. W. Russell) は、『心の分析 (*The Analysis of Mind*)』⁽⁵⁷⁾ という、人間の精神の科学を反省的に学究する書物を出版している。この人間の心に関する論議の序文において、科学的な研究の二つの異なった傾向として、「心理学」と「物理学」を挙げているが、その考察は現在の科学と精神の状況を予見しているようで興味深い⁽⁵⁸⁾。

ラッセルは心理学の性向を、特に行動主義 (Behaviourist School) に着眼しながら、心を扱う学問がより物質的になっていくこと、materialisticなポジションを取りつつ、生理学や外部の物質的な観察の徹底へと、学理の形成を依存させていくこと (dependent on physiology and external observation) を予言的に論じている⁽⁵⁹⁾。ラッセルのこうした卓見は、彼がフロディアン (Freudian) に

よる精神分析学の原理を知り、十分な形而上学的な素養を身に着けながらも、客観へと依存を増す心理学、徹底した物質や行動への観察、エビデンス重視へと至るパラダイム性向を既に予言的に見出していることである。

一方でラッセルは、本来的に「物質を科学」する学問である物理学を取り上げ、「精神を科学」する心理学が物質的な分析へと進む傾向とは逆に、物理学が通俗的な物質を扱う次元から異次元へと深める洞察へ、物理学者のエディントン (Arthur S. Eddington) の空間と時間及び重力に関する論議を引用しながら⁽⁶⁰⁾、単純な唯物論から離れていく様相を予見的に論じる。これは近年においても、例えば、物理学者のランドール (Lisa Randall) が、異次元と宇宙、ワープ (warped) を対象した理論構成、存在への隠れた次元 (Hidden Dimensions) を科学的に考察していることを指摘するまでもなく⁽⁶¹⁾、物理学が高度にメタフィジカルな志向を深めていることは明らかであろう。

こうした心の分析 (*The Analysis of Mind*) で指摘されるような、physical/metaphysicalな原理性向の分裂状況について、どうすれば精神を調和的に学問の俎上に乗せる思考を見出し得るだろうか。ラッセルが注目しているのが、ジェイムズ (William James) の思考である⁽⁶²⁾。ジェイムズは、教育や子育ての原理形成へ甚大な影響を与えたデューイのプラグマティズムとも系譜学的に連なり、同時に心理学への基礎的体系化に寄与したことで知られる。

そこにあるのは、リアリティと精神、形而上と形而下、objectとsubjectという排他的な二元論を克服して多元的 (pluralistic) な思考を構想する、断絶から連続性への世界観である⁽⁶³⁾。ラッセルはこうした思考を、行動主義心理学の源流ともいえるワトソン (John B. Watson) とまでも交流を有しながら、反省的に思索を探究したのである⁽⁶⁴⁾。

母子関連の対人援助原理形成を論考しながら、そこに通底する精神の位相を考察しようとする時に見出されるのは、いかにそれらの多様な原理が——表面的には大きな変異が見られる原理においても——、相関性を有しているかであり、学理領域 (disipline) を多元的に分析で

きる学際的な（interdisciplinary）原理を創造していく意義があらうということである⁽⁶⁵⁾。

もし、排他的で科学的進歩主義を絶対として見ようとするなら、より新しい原理は優越し、古き原理を相対的に劣ったものとして序列化する思考が湧現しよう。そうした時、喫緊に解明された瞬間的に有意義な科学的真理は重要視されるが、過去に語られた原理的な言説——例えば「母性保護論争（平塚らいてう、与謝野晶子、山川菊栄・山田わかによる論争）」のような保育原理に関わるようなトピック——は、相対的な意義を低下させるであろう。さらに急進的に科学技術と原理領域の研究を断絶すれば、原理や理論領域それ自体の存在意義を無効化できるかもしれない。

しかし、論及してきたように、母子福祉に関わる対人援助原理形成にある、慈善活動の実践と科学は密接に相関性を有しており、深い次元で交わり合って発揚してきた。近代の最大規模の子どもへの慈善活動である石井の実践は、社会や家族から剥奪された子どもへの援助を形成したのみならず、孤児院の経営を継承した大原との精神の交流を通して科学化へと現実に相関する。石井の死後には科学への傾斜が進み、科学的な研究所を形成していった。

この科学の発現の源流に敬虔なボランティアがあることは、ますます細分化して複雑になる科学化の創出や理念を改めて考察する際に示唆的である。石井と大原は同様に、アメリカンボートに関わるミッションに関連していた。経営と科学化を進めた大原さえも、強い使命感を有していたことは上述の通りである。

現在、複雑で拡大する科学は、子どもや家族に関わる精神や社会、臨床心理の関係領域に深く浸透し、細分化した教示やエビデンス、ケース/事例の膨大な情報が流出している。性と生殖に関わる妊娠・出産、さらに、結婚から子育てへといたる私事の世界形成に関する科学的情報が錯綜して、リテラシー能力やその教育もさらに高度なものが要求されよう。

精神や対人援助に関する科学は、ラッセルが予見したような客観と観察への依拠の傾向と共に、より細分化したエビデンスが求められている。こうした細部のデータ

が、総体として全体論的にいかなる意味を生み出しているのか、専門化した研究が進むほどに、その源流にある理念の意義が問われよう。

特に、本論で指摘した生命の誕生に関わる母子の科学や対人援助実践の分野は、人間の発育や生き方そのものへの影響があり、その源流にある原理を改めて見出していく意義は重大であろう。理論的先見性への反省、解釈学的反省も擁護しながら、細部と総合を尊重できる学際的で広がりのある理念の構成が望まれる。

おわりに——精神の系譜と教育をめぐる

我が国のボランティアズムへと波及していったアメリカンボート、その源流はピューリタン（Puritan）に由来するボストンの会衆派（Congregationalists）を主流としており、エール大学、ハーバード大学、アマースト大学の誕生に寄与するなど、教育を格段に重視していた。そこに通底するエートスは、真理の探究と精神の交わりの重視、自由な学びへの志向である。その教育の精神は、リアリティへと表象化され結晶していき、可視化できる系譜を誕生させていった。

アメリカンボートの精神を有し、同志社大学を創立した新島譲は、アマースト大学で学び、クラーク（William S. Clark）に師事した。クラークは、北海道大学の源流である札幌農学校の教育形成に寄与してあまりにも有名であるが、内村鑑三や新渡戸稲造へと影響を与えて、内村門下の南原茂からその弟子である丸山真男へと連関する高等教育の形成へと波及していった。

丸山門下でもある赤松良子は、労働省婦人少年局の初代局長に就任していた山川菊栄の下で働き、後に男女雇用機会均等法立法に寄与し、文相を歴任するなどして、家族や母子に関する秩序の変容に影響を与えていった。菊栄は母子領域に対して先駆的に社会科学的な批評を有していた。夫の均は同志社で学んでおり、同様に同志社で学んでいた林源十郎は、姉の山川浦と結婚している。

岡山の倉敷を敬虔な交際の場としていた林源十郎は、石井十次と大原孫三郎、親類である山川夫妻と深い精神の交流があった。石井の影響を受けて使命感を陶冶していた大原は、壮大な慈善事業であった岡山孤児院を支え

るのみならず、経営を継承した後に解散して、慈善から科学へと変質させて、科学的研究所を誕生させていった。

心理学の形成においても、同じように倉敷で育まれたアメリカンボードの精神に影響を受けた元良勇次郎が同志社英学校の一期生として学び、ジョンズ・ホプキンス大学でホール（Granville S. Hall）、デューイの指導も受け、東京大学の心理学実験室を創設し、戦後の心理学形成や実験心理学に重大な影響を与える。元良が日本の心理学形成に寄与したように、ホールはアメリカ心理学会（American Psychological Association : APA）の誕生に関わったが、彼はハーバード大学でジェイムズの弟子でもあった。

同志社大学に初代学長へと就任したラーネットの愛誦句として、同大学のラーネット記念図書館に刻印された以下の言葉は、上述の教育と精神の連鎖、敬虔なボランティアの湧現を予見するようである。

LEARN TO LIVE AND LIVE TO LEARN（生きるために学び、学ぶために生きよ）

アメリカンボードやエール大学に由来した彼の教育の卓越性は、生きていくことと相関する教養の広がりや自由な学びへの擁護である。そこには一党一派の狭義の知識の伝授など見られない、生きていくことと学びへの、自由で連続的な解釈が見られる。

こうした多元的な次元の教育、そして、ボストンから倉敷へと相関して形成された学びの共同体においては、自らが生きていく精神それ自体へも反省的に学ぶ自由、生きていくために学ぶために、異質な次元へと入り込む自由をも尊重した。それは、相手の存在への敬虔な信頼があり、それへと応えるかのように、使命やボランティアの自由な交差が高揚し、密度の高い精神の系譜を形成していった⁽⁶⁶⁾。

本論で論じたように、慈善/charityやボランティアの原理形成は、やがて精神の交わりを相互に深めて高揚させながら、科学や経済、医学、社会へのクリティークなど多様な形で、リアリティへと具象化していったのである。

注

- (1) 細井勇「石井十次と岡山孤児院——岡山孤児院関係資料の紹介」細井勇・菊池義昭編・解説『岡山孤児院関連資料集成（第一巻）』不二出版, p.7, 2009.
- (2) 同上
- (3) 阿部志郎「石井十次——心の故郷」細井・菊池編・解説, 前掲書（パンフレット）
- (4) 同上
- (5) 中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会「社会福祉基礎構造改革について（中間まとめ）の要点」(<http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1006/h0617-1.html#3-2>) [accessed 2012-1-15]
- (6) 同上
- (7) 同上
- (8) Porter, M. E. *On Competition*. Harvard Business School Press, 2008; Porter, M. E., and E. O. Teisberg. *Redefining Health Care: Creating Value-Based Competition on Results*. Harvard Business School Press, 2006.
- (9) Prochaska, J. O., and J. C. Norcross. *Systems of Psychotherapy : A Transtheoretical Analysis*. Brooks/Cole, Cengage Learning, c2010.
- (10) 認知科学には多様な広がりや学際的な可能性があることを看過できない。see, e.g., 佐伯胖監修・渡部信一編『「学び」の認知科学事典』大修館書店, 2010；佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会, 1998.
- (11) Prochaska and Norcross, op.cit., p.519.
- (12) Ibid., pp.521-3.
- (13) Ibid., p.520.
- (14) Ibid., pp.454-484.
- (15) Cf. 国分康孝編『カウンセリング辞典』誠信書房, 1990.
- (16) 赤松良子・原田冴子監修・西村小夜子・上田晴子・福沢恵子・望月雅和・石津澄子編・解説『戦前婦人労働論文資料集成（全八巻）』クレス出版, 2002.
- (17) E.g. 望月雅和「戦後日本における働く女性と子育てをめぐる一考察——労働省婦人少年局の展開を契機として」『日本経営倫理学会誌』18, pp.223-233, 2011.
- (18) Cf. Aggleton, P. and R. Parker, eds. *Routledge*

- Handbook of Sexuality, Health and Rights*. Routledge, 2010; Look, P. V. et al., eds. *Sexual and Reproductive Health : A Public Health Perspective*. Academic Press, 2011.
- (19) 木原活信「ジョージ・ミラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編、室田保夫・田中真人編著『石井十次の研究』同朋舎, pp.1-26, 1999.
- (20) 近年も同志社大学にあるNeesima Roomにおいて関連の企画がなされている。cf. 「Neesima Room第39回企画展『アメリカン・ボード設立200年記念：まかれた種——神戸女学院と同志社』2011. (<http://www.d-arc.info/2011/04/neesima-room-1.html>) [accessed 2012.1.17]
- (21) 竹中正夫『倉敷の文化とキリスト教』日本基督教団出版局, 1979.
- (22) 土肥昭夫「竹中正夫の生涯」『キリスト教社会問題研究』57, pp.287-310, 2008.
- (23) 木村敏『人と人との間——精神病理学的日本論』弘文堂, 1972.
- (24) E.g. 村元沙千子「ヤスパースにおける『交わり (Kommunikation)』概念の教育的研究」『教育哲学研究』53, pp.76-89, 1986.
- (25) Visser 't Hooft, W. A. *The Pressure of Our Common Calling*. Doubleday, 1959.
- (26) 竹中, 前掲書, p.547.
- (27) World Council of Churches (WCC), W. A. Visser 't Hooft. (<http://www.wcc-coe.org/wcc/news/press/00/visser-bio.html>) [accessed 2012.1.17]
- (28) 竹中, 前掲書, p.335.
- (29) 同上, p.48.
- (30) 毎日新聞社編『十人百話』毎日新聞社, p.124, 1964.
- (31) Cf. 細井勇『石井十次と岡山孤児院——近代日本と慈善事業』ミネルヴァ書房, 2009.
- (32) 児嶋草次郎「刊行によせて」, 細井・菊池編・解説, 前掲書 (序文)
- (33) 二村一夫「大原社会問題研究所を創った人びと」『大原社会問題研究所雑誌』426, 1994. (<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/nk/magoiwa.htm>) [accessed 2012.1.17]
- (34) 河上肇『貧乏物語』弘文堂, 1917.
- (35) 二村, 前掲書.
- (36) 暉峻義等『乳児死亡の社会的原因に関する考察』大原社会問題研究所出版部, 1921.
- (37) 初版は1940年であるが、複製版が出版されており参照できる。cf. 労働科学研究所編『婦人労働に関する文献抄録』皓星社, 1998.
- (38) 兼田麗子『福祉実践にかけた先駆者たち——留岡幸助と大原孫三郎』藤原書店, 2003.
- (39) 赤松・原田監修, 前掲書.
- (40) 赤松「刊行の言葉」, 同上 (パンフレット)
- (41) 暉峻義等「労働階級夫人の出産に関する調査報告——産業経営における生物学的事実の価値についての卑見」『労働科学研究』2-2, pp.243-292, 1925.
- (42) 暉峻義等「妊婦に関する労働生理学的研究」(附「妊婦保護法規改正に関する提案」)『労働科学研究』9-4, pp.397-426, 1932.
- (43) 暉峻, 前掲書, 1925.
- (44) 暉峻, 前掲書, 1932.
- (45) 岩田正道「工場婦人と母性機能」『産科と婦人科』2-12, pp.995-1012, 1934.
- (46) 白井・横川, 前掲書.
- (47) Dewey, J. *The School and Society and the Child and the Curriculum*. The University of Chicago Press, 1991. Originally published in 1900.
- (48) 文部大臣官房学校衛生課「女教員産前産後における休養に関する調査」『学校衛生』5-12, pp.19-24, 1925.
- (49) 大阪府工場課調査「工場労働の妊産婦に及ぼす影響」『産業福利』3-5, pp.60-64, 1928.
- (50) 奥むめお「女性の社会的進出と乳幼児」『医事衛生』5-4, 1935.
- (51) 古瀬安俊「有夫女工の出産並にその生児に関する研究」『社会政策時報』19, pp.112-120, 1924.
- (52) 古瀬安俊・中川義次「労働婦人の妊孕並に生児保育に関する調査 (上)」『産業福利』7-3, pp.8-24, 1932; ——「労働婦人の妊孕並に生児保育に関する調査 (下)」『産業福利』7-4, pp.9-24, 1932.
- (53) E.g. 山川菊栄『女性五十講』改造社, 1933.

- (54) 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』岩波書店, p.231, 1961.
- (55) 同上
- (56) 同上, p.483.
- (57) Russell, B. *The Analysis of Mind*. George Allen and Unwin; The Macmillan Company, 1921.
- (58) Ibid., p.5.
- (59) Ibid.
- (60) Eddington, A. *Space, Time and Gravitation: An Outline of the General Relativity Theory*. Cambridge University Press, 1920.
- (61) Randall, L. *Warped Passages: Unraveling the Mysteries of the Universe's Hidden Dimensions*. Ecco, 2005.
- (62) Russell, op.cit., p.6.
- (63) James, W. *A Pluralistic Universe*. Harvard University Press, 1977. Originally published in 1909.
- (64) Russell, op.cit., p.6.
- (65) E.g. Frodeman, R., J. T. Klein, and C. Mitcham, eds. *The Oxford Handbook of Interdisciplinarity*. Oxford University Press, 2010; 川本隆史編『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣, 2005; Shulman, L., and A. Safyer, eds. *Supervision in Counselling: Interdisciplinary Issues and Research*. Routledge, 2007.
- (66) Cf. Dewey, J. *A Common Faith*. Yale University Press, 1960. Originally published in 1934.